

1 女性の性的反応に関するこ

2 れまでの研究結果の解釈

3

4

5

6

7

8 **著者:** Jane Thomas, BSc

9 **Twitter:** <https://x.com/LrnAbtSexuality>

10 **LinkedIn:** <https://www.linkedin.com/in/learn-about-sexuality/>

11 **ResearchGate:** <https://www.researchgate.net/profile/Jane-Thomas-18>

12 **著者のウェブサイト:** <https://www.nosper.com>

13 **電子メールアドレス:** [jane.thomas@nosper.com](mailto:jane.thomas@nosper.com)

14 **所在地:** イギリス

15 **開示事項:** すべての研究は著者自身の私的資金から資金提供されています。

16 **謝辞:** 技術的、精神的サポートをしてくれた夫ピーターと、長年にわたりたゆまぬ励

17 ましをくれたソーシャル メディアの忠実なフォロワーに感謝します。

## 18 要約

19 **背景:**これまでの研究には、女性の性的反応に関する誤った仮定が含まれており、再  
20 解釈が必要です。

21 **目的:**研究者が行った誤った仮定を特定し、以前の調査結果の別の解釈を提案します  
22 。

23 **方法:**新しい研究アプローチは、以前の研究結果を再解釈して、女性の性的反応に関  
24 するより現実的な見解をサポートします。この論文では、次の質問に答えようとし  
25 ます。

26 以前の研究から何を学べますか?

27 どのような方法が使用されましたか?

28 各方法の問題は何ですか?

29 研究者はどのような仮定を立てましたか?

30 調査結果に対する反応から何を推測できますか?

31 これまでの研究にはどのようなギャップがありますか?

32 **長所と限界:**このアプローチは、現実を反映したセクシュアリティの説明を提供しま  
33 す。ただし、男性の女性のセクシュアリティへの関心と女性のそれに対する関心の  
34 欠如は、女性の性的反応に関する現在の信念を更新するには多大な作業が必要であ  
35 ることを意味します。

36 結論: 一部の研究者は、調査結果に対する性的政治の影響を無視しましたが、他の研  
究者は、女性は性交によって自然にオーガズムに達するはずだと想定しました。

38 キーワード: 女性の性的反応、性研究、女性の自慰行為、性交。

39 準拠言語: この翻訳と原文との間に矛盾や不一致がある場合には、英語版が優先され  
ます。

# 41 目次

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 42 導入                        | 1  |
| 43 アルフレッド・キンゼイはクリトリスの役割を強調した | 2  |
| 44 マスターズとジョンソンは性交のみに焦点を当てた   | 3  |
| 45 シェア・ハイトはクリトリスと自慰について語った   | 5  |
| 46 スポットが再び人気に：性交             | 6  |
| 47 カプランとバッソンは感情的な反応について話した   | 8  |
| 48 誰かのオーガズムの必要性を主張するのは役に立たない | 10 |
| 49 結論                        | 12 |
| 50 参考文献                      | 13 |
| 51                           |    |

## 52 導入

53 ジークムント・フロイト (1905) は性交による膣オルガスムという用語を発明し、女  
54 性がマスターべーションで得るクリトリスオルガスムよりも好ましいと提唱した。  
55 男性のオルガスムはペニスの持続的な刺激に依存するが、女性の解剖学的構造の違  
56 いは、彼（または他の誰も）にとって矛盾とは思わなかった。男性が女性のセクシュ  
57 アリティを定義するのは不適切だと考えた人はいなかった。女性も自分の性機能を  
58 定義する動機がなかった。

59 歴史の大半において女性はオルガスムに達することができないと考えられていたが  
60 、研究者は現在、すべての女性が定期的かつ頻繁な性的反応を経験すると想定して  
61 いる。性交における役割は明確である。男性の役割は積極的で、性交を開始するに  
62 は勃起が必要であるが、女性の役割は受動的で、男性の主導権に協力することを含  
63 む。これらの違いにもかかわらず、男性がそうするからというだけの理由で、女性  
64 も性交でオルガスムに達するはずだと想定されている。

65 性的反応を研究する勇気のある人はほとんどいない。こうした少数の勇敢な人たち  
66 の結論は嘲笑され、拒絶され、あるいは無視されてきた。マスターべーションは、  
67 女性が自慰行為から特定の反応を楽しむ主要な行為であると特定されている。研究  
68 は、女性は恋人といふときの方が、より広範な官能的かつ感情的な快楽を経験する  
69 と語っていることを明らかにしている。女性の性的反応の描写におけるこの対照は  
70 、当然ながら、性的欲求を満たすために性交に頼る男性には非常に不評であるが、  
71 また、性器への露骨な刺激よりも愛撫を好む多くの女性にも不評である。その結果  
72 、女性の性的反応に関する研究は、男性（最もエロティックな行為として）と女性

73 (男性の賞賛と献身の証拠として)に受け入れられる性交を促進する場合にのみ歓

74 迎される。

75 アルフレッド・キンゼイはクリトリスの役割を強

76 調した

77 アルフレッド・キンゼイの研究は、男性（1948年）と女性（1953年）に特化した別

78 個の報告書とともに、広範囲に及んだ。キンゼイと3人の男性共著者は、1万人を超

79 える人々（男性5,300人、女性5,940人）と個人的にインタビューを行った。共著者と

80 して名を連ねるに値するような形で研究に貢献した女性はいなかった。インタビュ

81 ーを受けた人々は、さまざまな状況でのオーガズムの頻度を推定するよう求められ

82 た。匿名性は保証されていた。キンゼイは、当時の米国の白人人口を代表する統計

83 的サンプリング手法を使用した。

84 私は、自分の研究の一環としてアルフレッド・キンゼイの研究に初めて出会ったが

85 、彼の結論が自分の結論とほぼ一致していることに安心した。

86 (1) 男性は女性よりも性的に反応しやすい。

87 (2) 男性は一般的に女性よりも性交頻度を高くしたい。

88 (3) 女性の性的反応は、女性の自慰行為のテクニックによって最も明確に説明される

89 。

90 キンゼイの調査結果から、個人によって反応性に幅があることが分かり、女性は男

91 性よりも反応性が低いことが明らかになった。キンゼイは、女性の反応性に関する

92 これらの数値でさえ、感情的および政治的な圧力により誇張されていることに気づ  
93 いた。女性が単独で、または他の女性と行為を行った場合のオーガズムの頻度は、  
94 男性と行為を行った場合の報告よりもはるかに低かった。カップルの性交頻度と男  
95 性の反応性には強い相関関係があった。一方、女性のオーガズムの主張は性交頻度  
96 にほとんど影響を与えたなかった。

97 性交に対する女性の反応に対する男性の本能的な欲求（男性の反応への期待はポル  
98 ノに反映されている）により、女性は性交でオーガズムに達するべきだと考えてい  
99 る。研究者が女性に性交でオーガズムに達するかどうか尋ねると、その質問はそれ  
100 が可能であることを暗示している。論理や研究証拠がないにもかかわらず、一部の  
101 女性は必ず「はい」と答える。性的反応性の定義に照らして検証されたことはない  
102 にもかかわらず、女性のオーガズムの主張は研究者によって記録されたというだけ  
103 で信頼性を獲得した。

104 マスターズとジョンソンは性交のみに焦点を当て  
105 た

106 1966年、ウィリアムマスターズとバージニアジョンソンは、実験室環境で性交に進  
107 んで応じるカップルを観察する研究を行いました。彼らは、女性が性交でオーガズ  
108 ムを経験したと報告したカップルのみを選択したため、平均的なカップルを代表す  
109 ることは決してできない小さなサンプルとなりました。女性の性的反応は、女性に  
110 インタビューするのではなく、交尾中の生理学的变化を記録することによって評価  
111 されました。マスターズとジョンソンは、生理学的变化だけに焦点を当てることで

112 、行為の心理的影響を省いていました。性的興奮は、たとえば勃起などの身体的変  
113 化を説明する場合もありますが、精神的興奮の状態を説明する場合もあります。こ  
114 のアプローチは、男性と女性の経験を同等にするのに役立ちましたが、科学的に言  
115 えば、性的反応の不完全な説明です。

116 共生関係は、必ずしも両者に同じ報酬をもたらすわけではありません。たとえば、  
117 肉食動物は、生き残るために食べる草食動物に同情する余裕はありません。同様に  
118 、男性は性欲のために、妊娠行為について女性がどう感じるかについてほとんど関  
119 心がありません。草食動物が直面する逃げるか戦うかのシナリオは、性交を意図し  
120 た男性に近づかれた女性が直面する脅威に例えることができます。女性は接触を歓  
121 迎するかもしれませんし、そうでないかもしれません。いずれにせよ、女性の潜在  
122 意識と本能的な生理的反応を測定することは、男性が経験する意識的な精神的覚醒  
123 と論理的に同一視することはできません。

124 マスターズとジョンソンは、性的反応の4段階線形モデルを提案しました。欲望(リ  
125 ビドーまたは興奮)、覚醒(プラトーと呼ばれることがあります)、オーガズム、解決  
126 です。彼らの研究は、女性の性的反応を性交の観点から定義しているため人気があ  
127 ります。この研究では、膣の潤滑を勃起したペニスで定義される男性の覚醒と同一  
128 視しました。膣の潤滑は性交、ひいては生殖を促進しますが、意識的な精神的覚醒  
129 の証拠ではありません。

130 シエア・ハイトはクリトリスと自慰について語つ

131 た

132 1976 年、シア・ハイトは博士研究の一環として女性誌を通じて匿名のアンケートを  
133 回覧した。彼女は 3,000 件を超える回答を得たが、彼女のサンプルは統計的ではな  
134 く、したがって平均的な女性を代表するものではなかった。しかし、ハイトの研究  
135 は女性に発言権を与えた。彼女の明確な質問に対する回答の多くが彼女の本に記録  
136 されたからである。女性たちは、匿名でなければ正直に答える勇気は決してなかっ  
137 ただろうと認めた。

138 ハイトは女性に性的反応に関する長い詳細な質問をすることで、自慰行為から生じ  
139 るオーガズムがより明確に説明されるため、自慰行為をする女性を引き付ける可能  
140 性が高かった。彼女は、自慰行為の割合が高く（サンプルの女性の 82% が自慰行為  
141 をしたと回答）、性交のみによるオーガズムの割合が低いことを発見した。サンプル  
142 のうち、クリトリスへの追加刺激なしで性交だけで定期的にオーガズムに達したと  
143 答えたのはわずか 30% だった。

144 キンゼイと同様に、ハイトは女性の性的満足度はオーガズムの主張とは関係なく、  
145 感情的な報酬に依存することを発見した。ハイト（1976）は次のように指摘してい  
146 る。“... there was no correlation with frequency of orgasm: women who did not orgasm with  
147 their partners were just as likely to say they enjoyed sex as women who did” [...]オーガズム  
148 の頻度との相関関係はなかった。パートナーとオーガズムに達しなかった女性は、  
149 達した女性と同じくらいセックスを楽しんだと言う可能性が高かった】（p. 420）ハ

150 イトは回答者と個人面談を行っていないため、女性の性的反応の経験を評価できなか  
151 かった。恋人と推定されるオーガズムに関する解剖学的構造について尋ねられた  
152 とき、女性は、通常男性から得た性知識のレベルに基づいて、膣またはクリトリス  
153 に言及する。

154 女性のオーガズムは一人で達成するのが最も簡単であることを確認することで、ハ  
155 イトの研究はマスターべーションをする女性を安心させた。しかし、彼女はまた、  
156 恋人とオーガズムに達する女性もいることを示唆し、女性は重要な経験を逃してい  
157 ると感じことになった。それにもかかわらず、人口内でのオーガズムの発生率を  
158 確立するためのさらなる研究は行われておらず、それでも女性のオーガズムは一般  
159 的であると想定されている。クリトリス刺激を促進する研究（キンゼイとハイトが  
160 提唱）が否定されていることを考えると、（1）自慰行為をする女性は少ない、（2  
161 ）パートナーとの経口または手によるクリトリス刺激でオーガズムに達する女性は  
162 少ない、という結論に達することができる。

## 163 スポットが再び人気に：性交

164 G スポットは、女性のオーガズムを引き起こすと信じられていた膣内の特定の領域  
165 でした。この考えは大きな人気を博し、理論ではなく確立された事実として提示さ  
166 れてきました。しかし、アンドレア・ブリ (2010) は、G スポットの存在を裏付ける  
167 証拠を見つけられませんでした。彼女は、元の研究が非常に小さなサンプル サイズ  
168 (世界中で 30 人未満の女性) に依存して、すべてのカップルにメリットがあるかのよ  
169 うに提示された解決策を提案したことに驚きました。

170 G スポットのような理論は、女性が性交でオーガズムに達するという信念を検証し  
171 ようとします。しかし、これは女性のオーガズムを取り巻く謎を見落としています  
172 。また、女性が自慰行為に使用する直接的なテクニックも無視しています。マスタ  
173 ーズとジョンソンは、女性が性交でオーガズムに達するのは、突き出すペニスによ  
174 って陰核亀頭が引っ張られるためだと示唆しました。あるいは、突き出すペニスが  
175 膣壁を通して陰核を刺激するため、女性はオーガズムに達すると信じられています  
176 。男性がオーガズムに達するには直接的な刺激が必要なので、女性に間接的な刺激  
177 を正当化しようとするのは非論理的である。

178 フロイト以来、女性の自慰行為と性交の刺激の矛盾は明らかであった。キンゼイは  
179 女性の自慰行為の有効性とオーガズムに達するためのクリトリスの役割を確認した  
180 。彼の結論は、男性は前戯にクリトリス刺激を加えるべきだという勧告につながっ  
181 た。マスターズとジョンソンの時代までに、ペニスとクリトリスは同じ胚器官から  
182 発達することが知られていた。研究者は解剖学と物理的刺激に焦点を当て、精神的  
183 な興奮を完全に見落としたり無視したりしている。

184 しかし、女性がオーガズムに達する手段がずっと性交だったとしたら、女性はオー  
185 ガズムに達することができるというキンゼイの発見に対する興奮を説明するのは難  
186 しい。異性愛者は、恋人と起こる女性のオーガズムについて科学者に教えてもらう  
187 必要はないだろう。カップルは自分でそれを発見しただろう。社会は性交を好みま  
188 す。なぜなら、性交は男性の欲求を満たし、生殖につながるからです。女性の自慰  
189 行為、つまり女性のオーガズムは稀です。

190 力プランとバッソンは感情的な反応について話し

191 た

192 経験したことがないと主張する問題をどうやって解決できるのか、理解するのは難  
193 しい。しかし、セックスセラピストのヘレン・カプラン（1979年）とローズマリー  
194 ・バッソン（2000年）は、性欲と性的興奮の欠如を訴える女性を治療した。彼らは  
195 、女性が男性の経験に共感していないことを発見し、マスターズとジョンソンの性  
196 的反応モデルを否定した。ヘレン・カプランの欲望、興奮、オーガズムの3段階モデ  
197 ルは、欲望の欠如を訴える女性を治療することが多いセラピストにとって役立った  
198 。男性の性欲は女性に性的に魅力的だと感じさせるかもしれないが、必要とされて  
199 いるという感情的な安心感は性欲と同じではない。

200 理論モデルを提案するのは簡単だ。女性の感情的な反応が男性の性的衝動と同じで  
201 あることを証明するのは、はるかに問題が多い。バッソン（2000年）は次のように  
202 示唆した。“The rewards of emotional closeness—the increased commitment, bonding, and  
203 tolerance of imperfections in the relationship—together with an appreciation of the subsequent  
204 well-being of the partner all serve as the motivational factors that will activate the cycle next  
205 time.” [感情的な親密さの報酬、つまり関係におけるコミットメント、絆、不完全さ  
206 への寛容さの増加は、その後のパートナーの幸福に対する感謝とともに、すべて次  
207 回のサイクルを活性化する動機付け要因として機能します。] (p. 54) 関係上の報酬（  
208 恋人を喜ばせることから生じる）が性欲に等しいと示唆することは、女性が性的興奮  
209 やオーガズムなどの性的報酬を得る女性のマスターべーションからの証拠も無視し  
210 ています。バッソンは、オーガズムは女性が恋人に満足するために不可欠ではない

211 ことを確認しました。しかし、性科学者は女性の性的機能不全をオーガズムの観点  
212 から定義し続けています。

213 ほとんどの男性は、パートナーのオーガズムよりも性交頻度を最大化することに興  
214 味があります。男性は前戯による興奮を楽しんだり、性交を容易にし快感を高める  
215 膣の潤滑を誘発するために使用したりできます。男性はこの潤滑を生理的反応では  
216 なく意識的な興奮と誤解しています。男性が女性にセックスを強要している証拠が  
217 あるにもかかわらず、女性がセックスに応じる義務を感じているという考えに男性  
218 は屈辱感を覚えます。男性は女性に対する感情的な依存を認めることを嫌がります  
219 。 “Furthermore, desire for sex is not always the primary motive for engaging in sex; women  
220 describe a range of personal (e.g. increasing self-esteem) and interpersonal (e.g. increasing  
221 connection with partner; feeling obligated) reasons for engaging in partnered sex.” [さらに、  
222 セックスへの欲求が必ずしもセックスをする主な動機とは限らない。女性はパート  
223 ナーとセックスをする理由として、個人的な理由（自尊心の向上など）や対人関係  
224 上の理由（パートナーとのつながりの強化、義務感など）を挙げている] (Thomas  
225 & Gurevich, 2021, p. 84)

226 キンゼイは、女性のオーガズムの主張は性交頻度に影響しないと結論付けたが、ハ  
227 イトは、女性はオーガズムに関係なく性交を楽しんでいると示唆した。今日、女性  
228 の性機能障害のレベルが高いことは、女性が男性と同じ性交頻度を望んでいないこ  
229 とを示している。セラピストはまた、女性がセックスをするのはエロティックな理  
230 由ではなく感情的な理由であると結論付けている。数十年前に否定された研究結果  
231 がようやく確認されたが、キンゼイ、ハイト、その他多くの人がすでに同じ結論を  
232 導き出していたことを誰も認めていない。

233 誰かのオーガズムの必要性を主張するのは役に立

234 たない

235 キンゼイがオーガズムに注目したのは、女性が男性との社会的、政治的、性的平等

236 を主張し始めた頃だった。男性にセックスを売って儲ける金は、積極的に性的な女

237 性の描写によって成り立っており、女性も自分の性的イメージに同意するものと思

238 われてきた。しかし、ほとんどの女性は関係の感情的な側面を重視し続けている。

239 男性はパートナーとの性行為による自身のオーガズムをあまり重要視していないに

240 もかかわらず、一部の女性がオーガズムに達するために自慰行為をしていることが

241 わかったことで、オーガズムは女性が恋人と満足するために不可欠であるという誤

242 解が生まれた可能性がある。

243 男女の反応性を比較すると、女性は欠陥があることがわかる。“... whenever physical

244 contacts or psychologic stimuli had led to orgasm, there was rarely any doubt of the sexual

245 nature of the situation, [...] For these reasons, the statistical data [...] have been largely

246 concerned with the incidences and frequencies of sexual activity that led to orgasm. The

247 procedure may have overemphasized the importance of orgasm”. [...] 身体的な接触や心理的

248 刺激がオーガズムに至った場合、その状況が性的な性質を持つことに疑問の余地は

249 ほとんどなかった。 [...] これらの理由から、統計データ [...] は主に、オーガズムに

250 至る性行為の発生率と頻度に関するものであった。この手順は、オーガズムの重要

251 性を過度に強調していた可能性がある]。(Kinsey 他、1953 年、p. 510)

252 Kinsey は、男性の反応性は年齢とともに徐々に低下するが、60 歳でも女性の反応性

253 の平均を超えていることを発見した。女性の反応性は、生涯を通じてほとんど変化

254 しない。男性の反応性の低下は、性交頻度が時間の経過とともに低下する理由を説  
255 明できる。Kinsey はまた、男性は女性よりも乱交的であることも発見した。今日、  
256 カップルは、性欲の不一致はよくあることだと知って安心する場合でも、これらの  
257 事実を知らされていない。性交を促進するという目標は、研究証拠の欠如にかかわ  
258 らず、調査結果の拒否を正当化しているように思われる。なぜマスターべーション  
259 は性交よりも性的に満足感が高いのかセラピストに尋ねたところ、アルフレッド・  
260 キンゼイやシェア・ハイトの研究について言及する人は誰もいなかった。性科学者  
261 は、女性が自らの反応を楽しむ能力があるかもしれないことを認めるよりも、男性  
262 のニーズに応えるという女性の役割に焦点を当て続けている。成人してからずっと  
263 オーガズムを得るためにマスターべーションをしてきた女性として、私は性的反応  
264 をよく知っている。また、恋人との性行為やエロティシズムを楽しむことについて  
265 も自信を持って語れる。しかし、男性からの刺激でオーガズムに達しないという理  
266 由だけで、私の経験は依然として機能不全に分類される。女性の性的役割と、女性  
267 が自分の反応をどのように楽しむかは区別しなければならない。

268 結論

269 (1) キンゼイの研究は、意図せずして、性交によるオーガズムに関する女性の根拠の  
270 ない主張によって、より説得力のある女性の自慰行為の体験が軽視される結果とな  
271 った。

272 (2) 科学者は、間接的なクリトリス刺激が性交による女性のオーガズムを引き起こす  
273 可能性があるという理論を提唱する際に、女性のより直接的な自慰行為のテクニッ  
274 クを無視している。

275 (3) すべての女性がオーガズムを知っているという仮定により、女性のオーガズムは  
276 、性的な反応ではなく、恋人との感情的な報酬の観点から定義されるようになった  
277 。

278 (4) 性交でオーガズムに達しない女性を機能不全と分類することで、自分自身の反応  
279 を楽しんでいる女性の体験が性科学から除外されている。

280 參考文献

- 281 Shere Hite. *The Hite report*. Macmillan Publishing Company. 1976.
- 282 Burri, Andrea, Cherkas, Lynn & Spector, Timothy. ANATOMY/PHYSIOLOGY: Genetic and  
283 Environmental Influences on self-reported G-Spots in Women: A Twin Study. *The Journal*  
284 *of Sexual Medicine* 7.5 (2010): 1842-1852.
- 285 Kaplan, Helen. *The New Sex Therapy: Active Treatment of Sexual Dysfunctions*.  
286 Brunner/Mazel. 1974.
- 287 Basson, Rosemary. The female sexual response: A different model. *Journal of Sex & Marital*  
288 *Therapy* 26.1 (2000): 51-65.
- 289 Thomas, Emily & Gurevich, Maria. Difference or dysfunction?: Deconstructing desire in the  
290 DSM-5 diagnosis of female sexual interest/arousal disorder. *Feminism & Psychology* 31.1  
291 (2021): 81-98.
- 292 Kinsey, Alfred, Pomeroy, Wardell & Martin, Clyde. Sexual Behavior in the Human Male.  
293 Indiana University Press. 1948.
- 294 Kinsey, Alfred, Pomeroy, Wardell, Martin, Clyde & Gebhard, Paul. *Sexual Behavior in the*  
295 *Human Female*. W.B. Saunders Company. 1953.
- 296 Thomas, Jane. *A Research Approach based on Empirical Evidence for Female Sexual*  
297 *Response*. Nosper.com. 2024